

平成30年度 栃木県校友会 学術研修会ならびに賀詞交歓会

平成30年度栃木県校友会学術研修会ならびに賀詞交歓会が平成31年2月17日(日)、宇都宮市ホテルニューイタヤにて会場いっぱいの参加者を集め開催された。

午後1時半、柴田征紀県校友会専務理事(86回)の司会で始まり、安西未央子県校友会副会長(68回)の開会挨拶の後、恒例の校歌斉唱を行った。

続いて、佐川徹三県校友会会長(68回)の報告事項を含めた挨拶があった。関東地区校友会懇和会の参加御礼と結果報告や県歯科医師会が主管した第39回全国歯科保健大会開催(8020運動30周年記念事業)に対しての参加協力の御礼、遠隔画像診断システムの活用について、栃歯懇の発会の経緯と現況、美酒美味探求の会、東京・新潟をつなぐ会、D Muse 2019 開催の件、県女性歯科医師会主催の公開講座、統一地方選での対応等、様々な情報を知らせていただいた。そして校友会に関わる催しへのさらなる参加を求める趣旨の発言があった。

その後、近藤勝洪校友会本部会長から本校の入試、国家試験の現状、大学で起きた火災は大きな問題もなく鎮火したこと、全国都道府県校友会会長会議での共済制度改正、会員功労金制度廃止の経緯についてのご報告があり、また、栃木県校友会は「東京・新潟をつなぐ会」など先進的な試みを行っているとお褒めの言葉をいただいた。

続いて、講演会座長の臼井正人県校友会副会長(73回)から今回講師の添野雄一生命歯学部病理学講座教授(87回)の紹介があり、講演開始となった。

演題は「変わる疾病構造 10年先の病理と臨床」であり、内容は、高齢化等による疾病構造の変化に伴う歯科診療の変化を厚生労働労省も重く見ていて、国家試験の出題も変わってきているという話で始まった。日本ではう蝕は減っているが世界的には増加している。飲みこまれた口腔細菌により腸内細菌叢が変化し全身に影響を与えていることなどを紹介された後に、病理学にも古典的概念から免疫学的な進歩や分子細胞学的な進歩により変化が起きていることを話された。

例として細胞の死を挙げられ、壊死とアポトーシス(枯死)の違い、そしてその壊死やアポトーシス

もさらに細分化されてきていることなど説明された。筆者には未知な内容が多かったので知らなかった単語だけ以下に列記する。

ネクロトーシ

ス、内因性・外因性アポトーシス、PAMP、DAMP、ネトーシス、分化転換(Transition)、SNP、CNV、エクソソーム、口腔潜在的悪性疾患、マイクロバイオプシー等々。つまり書ききれない多くの知識を教えてくださいました。歯髄ポリープの上皮はどこから来るか、歯根嚢胞の上皮はどこから来るか? などは未だ究められていないようだった。こちらがアップアップなところで丁度良くコーヒープレイクとなり、ホッとした。

ブレイク後再開した後半は、学内の様子を写真と今の学生意識調査から詳細に見せていただいた。特に印象的だったのは、女子学生の活躍の話だった。病理という我々一般開業医にはハードルの高い話を分かりやすく話され、同県人として、学内にこれからRNAの時代が来るという、まさに先端の分子細胞学研究分野に、未だ見えていないものに挑む人材を得たことは大変心強いと感じられた。佐川会長の謝辞の後、臼井副会長の閉会の挨拶で講演会はお開きとなった。

講演終了後、8階のオーロラに会場を移しての賀詞交歓会が宮下均県歯科医師会会長をお迎えして開かれた。遅澤弘明議長(67回)の音頭での乾杯の発声に、多くの飲んべえを抱える当県の校友たちは待ちきれないとばかりに酒宴となり、盛り上がった。多くの参加が賀詞交歓会にもあり、大変喜ばしいことだった。毎度のぞっくばらんな会なので校友各位にはさらなる参加を望みたいと感じた。

(前橋 潮・75回記/新島 祥・101回写真)



講演する添野教授